

はじめに

「計算問題は どうやって攻略すれば良いですか?」、「論述対策って どうしたら良いですか?」—— 予備校で多くの受験生から受ける相談です。

計算問題は、国公立大二次試験や私立大入試だけでなく、大学入試センター試験でも少なからず出題されます。そして論述問題は、二次・私大でよく出題されています。ならば、当然にその対策はしておきたいところです。計算問題・論述問題は、さまざまなパターンの問題にあたって経験を積むことが大切なのですが、市販の問題集でも多くは抜かれておらず、その機会に恵まれないという状況がありました。冒頭のような相談を受けるたびに、「そうした対策に有益な学習教材があれば良いのに」と思ってきました。それがようやく実現しました。本書は、計算と論述に特化した、「政治・経済」問題集です。ぜひとも本書を活用して、しっかりと計算と論述の対策をしてください。

とはいえ、計算問題であれば、「算数レベルじゃん」といったわりと簡単な設問から、「これって数学の問題じゃないの」と思えるような設問まで、難易度や必要な技能に差もあります。論述問題であれば、単純な定義問題から自分の考えをまとめる問題、指定字数も20字程度からかなりの字数のものまであり、パターンは多岐にわたります。そこで本書は、みなさんの志望校の入試傾向に合った活用ができるように工夫をしました。活用の仕方は、次にある「本書の構成と使い方」を参照してください。

標準的なパターンの問題を攻略し、さらに計算問題・論述問題を固めれば、入試対策としてまさに「鉄壁」、「鬼に金棒」です。みなさんが入試合格を勝ち取るための、本書は一助になれるものと思います。では、早速はじめましょう。

梶 明宏・吉見直倫

本書の構成と使い方

(1)

本書は大きく、「第1部 計算問題編」と「第2部 論述問題編」に分かれています。それぞれの部とも、構成はほぼ共通しています。

それぞれの部のはじめには「ガイダンス」があり、**全体的な留意事項や心構えのほか、計算問題や論述問題の出題パターンについて説明しています。**まずはこの「ガイダンス」を一読してください。そして、学習分野に応じて章を設け、メインとなる「例題」と、それに対応する「練習問題」が掲載されています。なお、「練習問題」の解答は別冊にまとめられています。

(2)

「例題」「練習問題」とも、一つずつの設問について、難易の目安を「★」印を使って3段階で示すとともに、設問のパターンを示しました（パターンの分け方については「ガイダンス」を参照してください）。**これを目安に、自分の志望校や学習状況に応じた使い方ができると思います。**

たとえば「計算問題編」であれば、「数学はちょっと苦手なんだよね」という人は、まずは「★☆☆」のランクの問題に一通り挑むことから始めましょう（「★★★」のランクの問題は飛ばして後回しにして良いでしょう）。あるいは論述編でも、「志望校では定義を簡潔に答える問題が中心なんだよな」という人は、「簡潔定義型」と表示されている問題に優先的に取り組みましょう。

(3)

ところどころに「漢字ドリル」というミニコーナーを設けました。全部で40あります。論述問題に限らず単語を記述する問題でも、**誤字で失点してしまう人は後を絶ちません。**そこで、間違えやすい漢字の書き取りドリルを採り入れました。こちらも「自分できちんと書いてみる」ことを実践し、知識の点検に役立ててください。なお、参考までに「誤答例」も付けました。

《計算問題編 ガイダンス》

■計算問題での得点力を育成するためには問題演習を重ねることが大切

この計算問題編では、そのタイトルのとおり、大学入試「政治・経済」でしばしば問われる計算問題に焦点をあてて演習することを通じて、その対応について学習します。入試本番レベルの問題の演習を重ねていけば、おのずと入試合格に必要な得点力は育つはずです。

■計算問題編の特長

この編の問題集は、実際の入試の過去問や独自に作成した問題をもとに編集・作成したのとなっています。そして設問は、「例題」と「練習問題」とに分けて掲載しています。「例題」では、単元ごとに代表的な計算問題を取り上げるとともに設問のポイントと解法を示し、「正解を導くための考え方」を確認していきます。「練習問題」では、「例題」で学んだ「正解を導くための考え方」を活用して実際に問題を解くことになります。

「例題」と「練習問題」は、難度の低い易問から難関私立大の難問まで幅広いレベルに対応できるように、また、大学入試において問われやすい計算パターンをほぼ網羅できるように、分野・単元ごとに掲載することを心がけました。この編で扱われた計算問題をひと通り学べば、「政治・経済」の標準的な問題集あるいは過去問の演習とは異なるアプローチ（他の受験生を一步リードするようなかたち）で、入試対応力を養成することができると確信しています。

■計算問題編を学習する上での注意

掲載された設問の一つひとつを、できる限り自力で解くことにしましょう（実際に手を動かして計算してみましょう）。また、解答や解説を参照しながら、自分の考え方が適切であったかどうかを、しっかりと確認していきましょう。

大切なことは、解答や解説、あるいは教科書・参考書などに立ち返りながら正解に至るための考え方を学び、次に同様の設問が出題されたときに対応できるように準備することです。たんに「解答して答え合わせをする」だけでなく、解説文を注意深く読み進め、計算問題への対応をマスターしていきましょう。

《論述問題編 ガイダンス》

■論述問題編とは

この論述問題編では、私立大入試でも意外と多くの大学で出題され、国公立二次試験では出題の主流である、論述問題を攻略するパートです。「論述」というだけで引いてしまう人や対策方法が分からなくて困惑する人も少なくないのが現状ですが、きちんとした学習を積むことで、十分な対応ができるようになるはずです。

■論述問題攻略の秘訣とは

論述問題攻略の秘訣は「とにかく書いてみる」ことです。大学入試には、(a)単語を解答する記述式問題、(b)語句選択問題、(c)短文正誤問題など、いろいろな形式があります。しかし、どの形式であれ、必要な知識は共通です。たとえば「赤字国債」がテーマだとすれば、「の発行は財政法で禁止されている」の空欄に、(a)なら「赤字国債」を記述で埋める、(b)なら示された語句から「赤字国債」という単語を選びその記号を答える、(c)なら「赤字国債の発行は財政法で禁止されている」という文を正文だと判断して解答する、という違いがあるだけです。「赤字国債の発行は財政法で禁止されている」という必要な知識は、全く共通です。「赤字国債の財政法での扱いについて説明しなさい」という論述問題であれば、「赤字国債の発行は財政法で禁止されている」と文で記せばよいだけなのです。

このように、違いは「解答のやり方」だけだとすれば、共通する必要な知識の上に、文や文章で解答するという「解答のやり方」の練習を積み重ねればよいだけです。だからこそ、論述固有の対策というのは「とにかく書いてみる」に尽きるのです。

■論述問題編の特長

国公立大二次試験や私立大入試から精選した論述問題をもとに、「例題」と「練習問題」を示しました。「例題」では、何にポイントを置いて書くべきなのか（何を射抜くには何が大切か）、指定された字数の中でどうまとめればよいのかを、必要に応じて反省材料となる「残念答案」も示しながら、詳しく解説しました。「練習問題」ではそこで習得した「書き方」をもとに、さらなる演習を積むことになります。

「例題」「練習問題」とともに、基本問題から難度の高い問題まで、短い字数のものから比較的に長い字数のものまで、いろいろなタイプのもを示しました。また、次で詳述しますが、一口に「論述問題」といっても、そこで問われている（あるいは答えるべき）内容には、さまざまなパターンがあります。「この問題はどのパターンなのか」も示しましたので、自分が志望する大学のタイプやパターンにあわせて、学習を進めることができます。

■ 論述問題編の活用方法は

まずは「例題」から。「例題」というと「『例』だから読んで納得すればいいのかな」と思う人もいるかもしれませんが、それは違います。先にも述べたように、論述問題攻略の秘訣は「とにかく書いてみる」ことです。ですから、まず「例題」の設問だけを見て、自分ならどう書くか考え、実際に自分なりの答案を作成してみましょう。「どうしても糸口が見出せなくて書き始められない」という場合には、「設問のポイント」を読んで、改めて考えて答案作成にチャレンジしてください（解答例は最後の最後まで見ないでください）。とりあえず答案が書けたならば、今度は「書くべき事柄」と照らし合わせて、その事柄が書けているか（的を外していないか）を確認してください。そして最後に、解答例を参照してください。

なお、問題によっては「残念答案例」がありますが、これは的を外してしまった答案の例です。「書くべき事柄」をよりしっかりと理解するための材料です。自分の作った答案は、もちろん本人にとっては「よく書けた」というものでしょう。しかし、第三者が見ると「解答として不足だよ」ということがよくありますが、書いた本人は「なぜ不足なのか」がなかなか理解できません。残念答案例を参照することで「なるほどこれでは不足だな」として、書くべき事柄について理解を深めることができるとともに、「ありがちな残念」に陥らないようになれると思います。

次に「練習問題」。こちらでも書くべきポイントを示してありますので、「例題」と同じように、答案作成とポイントのチェックを進めてください。

いずれにせよ、解答例と一字一句同じである必要はまったくありません。要は、書くべきポイントが書けているかどうかです。逆にいえばポイントさえ外していなければ問題はいいのです。自分の答案をチェックする際には、解答例そのものの以上に、ポイントとの対比を重視してください。

■ 論述問題を恐れている人に

過去問集の模範解答を見ると、「文句のつけようのない専門的で素晴らしいもの」が多く示されています。「模範解答」ですから、それはある意味で当然でしょう。しかし、こうした模範解答を見ると「こんなの書けないよ」と思うでしょうし、それが論述問題を恐れさせてしまっている原因の一つなのかもしれません。ですが、高校までの学習を前提とする受験生が専門家に匹敵するような内容を示すのは、現実的には困難です。繰り返しになりますが、**受験生に求められているポイントを外さないことが、入試では大切なのです**（だからこそ、くどいようですが、ポイントとの対比を重視してください）。「表現の素晴らしさ」や「専門性」に、過度にこだわる必要はありません。この本でも、あえて「素晴らしさ」にはこだわらず、受験生の手が届くところでどう書いたらよいのか、その点を意識しています。